

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	平安時代日本語の語彙の層
Title(English)	Layers in the lexicon of Heian Japanese
著者(和文)	田中牧郎
Author(English)	Makiro Tanaka
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9581号, 授与年月日:2014年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:山元 啓史,中川 正宣,前川 眞一,赤間 啓之,平川 八尋,近藤 泰弘
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9581号, Conferred date:2014/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	要約
Type(English)	Outline

要旨 (和文 2000 字程度)

Thesis Summary (approx.2000 Japanese Characters)

本論文は、「語彙は、文献資料への現れ方に応じて分類すれば、層をなしているのが見える」「語彙の層は、漢と和の2つの要素の対立において明瞭に見える」という2つの仮説のもとに、平安時代の日本語を対象として研究を行ったものである(第1章)。

本論文の方法は、漢の文章と和の文章を選定し、それを電子テキストにして、語に分割して語に関する情報を付与してコーパスデータを作成し、そのデータを相互に比較し、その結果を表示するというものである(第2章)。

第3章では、いくつかの種類の文章の語彙調査を行って、『今昔物語集』(以下『今昔』と略称)巻12と巻27が、漢文訓読文と和文の対立を示すことを確認し、これを、語彙を比較する基本資料に定めた(3.1節)。この2つの巻の語彙を相互に比較することで、各巻の特徴語を抽出し、文体の違い(漢文訓読文と和文の違い)に基づく特徴語を判別し、それとほぼ同義である、他方の文体でよく使われる対立語を特定した(3.2節、3.3節)。そして、対立を、漢語(混種語を含む)と和語、和語の異品詞同士(特に、感情動詞と感情形容詞)、和語の同品詞同士の3つの類型に分類した(3.4節)。また、その語の対立関係からは、漢文訓読文の語彙の層、和文の語彙の層、中間的な語彙の層の3つの層が見えた。(3.4節)。

第4章では、『今昔』と、より和文的な文体で書かれている『宇治拾遺物語』(以下『宇治』と略称)の同じ内容の説話のパラレルコーパスを作成して、相互の語の対応を網羅的に調べることで、文体特徴語を抽出し、対立語を特定した。ここで見出された対立は、第3章の『今昔』巻12と巻27の比較よりも、和の層の側に寄ったところでの対立である。

第5章では、対立の第1の類型である、漢語(混種語を含む)と和語の対立について研究した。まず、平安和文における漢語について、時代ごとの比率と、時代ごとの、品詞別・意味分野別の新出語の数を調査し、和文で使われる漢語に、時代・品詞・意味分野による層があることを確認した(5.1節)。次に、個々の漢語が、『今昔』における漢文訓読文の説話と和文の説話に、どのように分布するかを調べることで、漢語が3層6段階をなしている様子を見出した。また、漢語が属する層に応じて、和語との対立関係の有無や、意味の対立の鮮明度が変わってくることを見た(5.2節)。さらに、漢の層の中でも、上の層にある漢語の事例と、下の層にある漢語の事例を取り上げ、それぞれの対立語との間の意味の対立の実際を分析した。その結果、上の層にある漢語は、和語の広い意味を漢語が細かく言い分けることが分かった(5.2節)。また、下の層にある漢語には、和語との間に明確な意味の対立があることが分かった(5.4節)。

第6章では、対立の第2の類型である、和語の異品詞間の対立の中で、特に多くの対があった、感情形容詞と感情動詞を分析した。その結果、感情主が1人称の場合には感情形容詞、2・3人称の場合には感情動詞という明確な対立を持つ一群の対が見出せた(6.1節)。それらの対には、述部の形式や、主部や従属節に示される感情の誘因を示す形式にも対立があることが分かった(6.2節)。

第7章では、対立の第3の類型である、和語の同品詞同士で対立する対の事例として、「おづ」と「おそる」を取り上げ、複合する動詞の種類、対象格を示す格助詞やその格助詞がとる語句を比較し、そこに意味の対立があることを明確にとらえた。そして、時代や文体によって語彙の層に変化が生じると、意味による使い分けにも変化が生じることも分かった。

第8章では、第3章から第7章までの考察を総合して4つのことを主張した。すなわち、(1)平安時代の語彙に本研究で3つの層が見え、先行研究と関連づけると、和漢の軸で5つの層が見えること、(2)異なる層にある語同士の間に対立が存在し、その対立には意味の対立が伴っていること、(3)その層と対立は資料に『今昔』を使ったことで見えたこと、(4)その層と対立はコーパスを用いる方法を使ったことで見えたこと、の4つである。

以上のことから、第1の仮説は証明された。また、第2の仮説については、語彙の層は対立において明瞭に見えるが、層があるところに必ず対立があるわけではないこと、対立は漢語と和語との間だけでなく、和語と和語の間にあることも多いことが確認された。

Tanaka Makiro: Layers in the lexicon of Heian Japanese, 2014

要旨 (英文 300 語程度)

Thesis Summary (approx.300 English Words)

This work hypothesises the existence of a layered lexicon of Japanese within documents from the Heian era, specifically volumes 12 and 27 of the *Konjaku Monogatari-shū* (*Konjaku*). These layers are furthermore hypothesised to appear through the contrast between the *kanbun kundoku bun* (classical Chinese style) and the *wabun* (native Japanese style) styles.

Three layers in the lexicon of *Konjaku* were uncovered by analyzing contrasting word pairs, defined here as pairs that are semantically similar, but which differ in style. The contrasting word pairs from these corpora were further classified into three comparative types.

Firstly, I confirmed the existence of three layers of Sino-Japanese words using word frequencies extracted from *kanbun kundoku bun* and *wabun* style tales. Further examination of these layers revealed a semantic contrast between Sino-Japanese and Yamato-Japanese words.

Secondly, I compared emotive adjective and verb pairs displaying a stylistic contrast, and discovered a group of pairs where the grammatical person of the experiencer was clearly discriminated, as well as the existence of a contrast between the form of the predicate and that of the agent of emotion.

Thirdly, the pair of “*odu*” and “*osoru*” was used to examine the case of Yamato-Japanese synonyms from the same word class. I showed that there is a stylistic and semantic contrast among these words, and that when the layer of the lexicon changes along the dimensions of time or style, the semantic usage also changes.

In summary, the lexicon of Heian Japanese was shown to consist of three contrasting layers, which also include a semantic contrast. Additionally, these layers and contrasts were discoverable due to the specific nature of the *Konjaku* vocabulary and were furthermore empirically motivated using corpus data.

The above points confirmed the initial hypothesis, while support for the second hypothesis was only partial: while there exist layers between contrasting words, the existence of layers between words in non-contrasting relationships are yet unproven; contrasts exist not only between Sino-Japanese and Yamato-Japanese words, but also often exist between different Yamato-Japanese words.